（第三種郵便物認可）

高額退職金どう退治

武蔵野市

市職員の四千万円を超す高額退職金が、厳しく批判されている東京・武蔵野市で、新市長が引き下げに乗り出そうとしたとたん、高齢職員の〝駆け込み退職〟が相次いだ。（22面）　社会部　長谷川淳一

駆け込み職員に苦悩

モラル問う前に制度改善急げ

武蔵野市は過去二十年間にわたり革新市政が続いた。豊かな財政を背景に、不動産を担保に〝有料福祉〟を実施する市福祉公社制度を、全国に先駆けて発足させるなど、独自の市政運営を行ってきた。しかしその一方で、市役所の内部では、労使のなれ合いとしか思えないような慣行が、長年続いていた。

冬には午後四時半で執務を打ち切る「冬時間制」が、最近まで行われていた。清掃など現業職員には青天井の特殊勤務手当も支払われていた。

現在の給与水準は、国家公務員を一〇〇とするラスパイレス指数で一二〇・九（昨年度）と、多摩地区二十六市中のトップ。職種や上下間の格差も余りなく、基本的には一般職員も幹部も勤続年数が同じならば、ほぼ同額の給料を支給される。常識をはるかに超えた高額退職金が支払われるようになった背景には、こうした〝土壌〟がある。

武蔵野市の退職金の算出法を見てみよう。地方公務員には定年制がないため、退職金を増額することを条件に、高齢職員に退職を迫る勧奨（肩たたき）制度が、一般的に行われている。

ところが、武蔵野市では、その増額の仕方が極端なのだ。五十五―六十三歳の職員が退職を申し出ると無条件で勧奨制度を適用し、給料月額からはじき出した基準額にまず五〇％を加算し、さらに勤続年数によって八―一二％を加える。これだけではない。職種別の在職年数に応じて一〇―三〇％の再加算を行う。

この結果、昨年度の場合、勤続三十年を超す職員には四千八百三十万円を最高に、幹部、現業職員の別なく四千万円を超す退職金が支払われた（別表）。国家公務員の場合、最高額は一般職員で千三百九十六万円、部長・審議官クラスでも二千七百九十五万円である。もちろん民間に比べても、武蔵野市の退職金がずぬけて高いことは明らかである。

この実態が初めて明らかになったのは、わずか二か月前。それまでかたくなに公表を拒んできた市側が、市民団体の抗議を受けて、市議会に資料としてしぶしぶ提出した。それが市民団体の手に流れ、改革を求める声が一気に噴き出した。

直後に行われた市長選では、劣勢とされていた保守系新人の土屋正忠氏（四二）が、革新市政の継承を訴える現職の藤元政信氏（六八）を小差で破った。この結果に、革新陣営は「敗因は退職金問題」とホゾをかんだ。

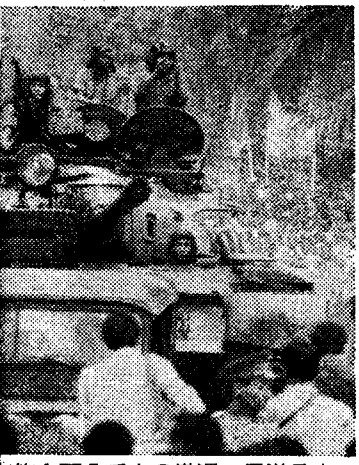
高齢職員の〝大量退職〟が始まったのは、その直後からである。二日に就任した土屋新市長が「退職金引き下げに必要な条例改正を六月にも行う」と発言すると、窓口の職員課には手続きの問い合わせや関係書類を求める職員が一段と増えた。実際に辞表を提出した職員は、七日現在で二十人。この中には課長四人、係長三人が含まれている。また、本来なら退職をそれほど急ぐ必要のない五十歳代の職員も、半数を占めている。

職員千三百人中、勧奨年齢に達した高齢職員の数は約百人。その二割が退職を申し出たわけだが、今後もさらに増えそうで、土屋新市長も頭を抱える毎日である。

「退職金条例が改正されない以上、現在の退職者には、従来通りの割り増し退職金を支払わなければならない。こう多人数になると、総額で十億円を超す。どこから資金を引き出すか」。それに条例改正に取り組む前に、難関の労使交渉が待ち構えている。

組合側は主張する。「高いという認識は組合も持っている。しかし、それではいくらならば妥当なのか。批判する側のだれも明言しない。武蔵野では、四千万円では家すら買えない。民間の退職金こそ、不当に低く抑え込まれているのではないか」。六十歳定年制導入を六年先に控えて、組合側も、少しでも有利な立場を確保しようと必死である。

退職金の引き下げは、世論に押されて、都庁などでもすでに取り組んでいる。駆け込み退職者のモラルを問う前に、一日も早く市民が納得できる制度に改めるよう、労使双方が努力すべきだろう。



約1万5千人の撤退。見送る市市に向かった（小倉特派員撮影）

ベトナム軍撤退後の行方

ASEANの〝返球〟にかかる

カンボジア駐留のベトナム軍の一部撤退が今月初めから始まったが、ベトナムの次の狙いは東南アジア諸国連合（ASEAN）とは政治解決をめぐって〝つかず離れず〟の状態にあるようだ。三月に開かれた非同盟首脳会議で芽生えたインドネシアとASEANとの対話ムードは中国の反戦闘態勢をとれなかった。バンコクの西側軍事専門家によると、同軍を支援してきたタイはこの〝戦わざる退却〟に激怒したといわれる。それもそのはずで、このような事態は

枯れないカーネーション

編集委員　小川　津根子

花屋さんに赤やピンクのカーネーションがふえると、店の中がいつもにまして華やかになる。そのうしろに、ふだんおなじみの花たちが肩身の狭そうな顔をして、かくれている。

「母の日だからねえ……」と花屋さんがいいながら、しょんぼり組の中からいたわるようにして、そろえてくれる。

こんなにたくさんのカーネーション、残ったらどうするの、と余計な心配をして花屋さんに笑われた。

「水が腐らないように薬がふ[illegible]てあるからね、結構もつんだ」

花屋さんの技術革新はこの程度にとどまらず、栄養剤を花や葉に吹きつけて長もちさせることだって出来るんだよ、とも教わった。

切り花がこうなら、立ち木だって負けてはいない。

青森県弘前市のサクラは花の見事さで天下に知られているが、ここの緑地公園に五千本のサクラがある。ことし東北地方には早い春が来て、二十四年ぶりの早咲きになった。

その公園に一本、きのうまで咲き続けたシダレザクラがある。

咲いたのが先月の十八日。きのうの突風で散るまで、二十日あまりも花をつけていたことになる。

サクラはふつう、二日に散る。北国は遅くそれでも二日か三日ぎわのいいのがサクラる。それがサクラとだったのは、アセトる薬品のせいだった

「うちのサクラ祭きのうまでの二週間日に満開です。その光客が減りまして……

窮余の一策で、職レーで吹きつける。日もった。八日後、大方は散り果てたが「薬の濃いとこに当か」、そのシダレザでも花をつけ続けた

スプレーをかけは、どんな散り方をう。現代の花咲かじ